

—第30回泌尿器科中部連合地方会—

パネルディスカッション

下部尿路の Urodynamics—臨床検査法としての意義

司会：宮崎 重（大阪医科大学）

近年、検査機器の改良、進歩に伴って、下部尿路の urodynamics に関する知見にも著しい進歩が見られ、従来の通説、概念にも変遷がみられるようになって来た。「dynamics」とは「動力学」であり、動力学とは物体の運動と力との関係を研究する力学の1部門であると定義されている。従って「urodynamics」とは、体内における尿の流れと、尿の輸送に関係している器官ないし組織の働き、すなわち尿路を構成している筋肉の作用機転と尿流との関係をしらべる学問である。

今回、黒田会長の御好意により、下部尿路の urodynamics に関するパネルディスカッションを持つことになりましたが、最近これに関する検査機器が広く普及する傾向にあり、臨床検査法としての urodynamics 検査の有用性およびその限界、現時点における問題点などを認識しておくことはきわめて大切であると考え、従来この方面の研究を精力的に進めておられる方々に、臨床応用に重点を置いて討議して頂くことにした。

先ず、八竹先生には uroflowmetry の測定上の問題点ならびにその臨床的意義について、桜井先生からは長年の経験にもとづいた voiding cysto-urethrogram の利点、長谷川先生には cystometry と外括約筋々電

図の同時測定による detrusor-sphincter dyssynergia の測定上の問題点、村山先生には尿失禁の診断、治療における UPP の意義、そして近藤先生からは特に最近問題となっている後部尿道機能におよぼす自律神経系薬剤の作用についてそれぞれ主議題として話をさせて頂きました。

しかし、これらの諸検査はいずれもそれぞれ単独で施行することは少なく、各検査を目的に応じて組合せて同時測定するわけでありますから、演者間で話の内容が重複することがあるのは当然であり、また、検査の実施にあたって個々の点で演者間に若干の意見の相違も見られた。

今回の討議を通して、どのような疾患に対してどのような検査を施行するのが適切であるか、また、それによって得られたデータはどのような意義を有するか、検査施行に際してはどのような点に注意を払うべきであるかなど多くの点がかなり明らかになったと思いますが、同時に検査器具、使用媒体（液体か気体か）、筋電図測定における電極の種類等々の相違による問題点も指適され、数多くのことが今後の問題として残されましたが、演者の熱心な討議によって一応の成果をあげたものと考えます。